

編集後記

コロナ禍の中、心理相談室の運営と資格関係の実習授業をいかに進めるかに翻弄された1年であった。昨春に発令された1回目の緊急事態宣言により心理相談室も休室に追い込まれ、来談下さる方々には面接の一時休止をお願いせざるを得なかった。緊急事態宣言の解除後も感染予防のため、面接は頻度を減らし、プレイルームでは限られたおもちゃを介してのセラピーにならざるを得なかった。そうした中で継続来談を取り止められる方々もいた。コロナの影響が心理療法のプロセスや効果にどのように影響したかを判断するのは時期尚早かもしれないが、今回本紀要に掲載された事例研究にも、面接の一時休止や頻度の減少がクライアントやセラピーのプロセスに与えた影響が表れているものがあるように感じる。次年度以降もコロナの影響は続くことが予想され、心理相談室も大学自体の方針に従いつつ柔軟に運営せざるを得ないと思われる。これまで当たり前と考え臨床実践の大前提としていた頻回の対面での面接が当たり前でなくなった今、我々の臨床の営みの本質とは何か、その本質を維持するために何ができるのかを考え、我々の方から臨床実践を再構築する必要に迫られているように思う。

心理相談室のスタッフとして心理臨床の学びの一步を踏み出した大学院生にとっては、コロナ禍での心理臨床の営みは彼らの初期経験として後のキャリアに何らかの影響を残すかもしれない。個人的な話になるが、筆者は大学院での臨床教育を終えた年に阪神淡路大震災に見舞われ、被災者の心理学的支援のアウトリーチを経験した。その際の経験は今でもリアルに思い起こすことができる。それが筆者の臨床実践にどれほどのインパクトを与えたのか自分でも明確には自覚できないが、自分自身の取り組みをより広い社会的視野から見直す契機にはなったように思う。頻回の対面での面接を奪われるという今回の出来事が、クライアントにとってどのように経験され、セラピーにどのような影響を及ぼすのかを、大学院生には初学者ゆえの純粋な目と心で参与観察していってもらえればと願う。

(石谷 真一)

編集委員

鶴田 英也・石谷 真一・國吉 知子・須藤 春佳・若佐美奈子・児玉 佳子
桑山久仁子・福井 友梨・鈴木奈津子・小林 葉月・小山真由花・中山貴久子

心理相談研究 第22号

2021年3月31日 発行

発行 神戸女学院大学大学院人間科学研究科心理相談室

〒662-8505 西宮市岡田山4-1

TEL 0798-51-8554

FAX 0798-51-8555

印刷 尼崎印刷株式会社

〒661-0975 尼崎市下坂部3丁目9-20

TEL 06-6494-1122

FAX 06-6495-2360